

## コロサイ人への手紙3章 「よみがえらされた者たち」

### 1A 上にあるものの追求 1-4

1B 神の右に座する方 1-2

2B キリストの現れ 3-4

### 2A 服の着脱 5-17

1B 地にあるからだの部分 5-7

2B 口から出るもの 8-11

3B 深い慈愛の心 12-15

4B 感謝の心 16-17

### 3A 主にあって従う関係 18-4:1

1B 家族 18-21

2B 労働 22-4:1

## 本文

コロサイ人への手紙 3 章に入ります。私たちは、前回、キリストにあって歩むことに対して、まよかしの霊性についてパウロが注意喚起しているところを学びました。律法に定められた祭りや安息日を守って、それで霊的になれるとしても、実は肉に対して力になっていないこと。食べるな、触るなという禁欲に対しても、それも逆に肉を喜ばせているだけで、価値がないこと。また、天使礼拝のように、幻を見ても、それは一見、謙遜に見えるけれども、むしろ、いたずらに思いあがっているのだということ。いろいろな偽りについてパウロは、話しましたね。

では、肉の力に対して何が、効力があるのでしょうか？それが、キリストに結ばれていることでした。キリストが死なれ、葬られ、よみがえられたように、結ばれている私たちも、罪に対してキリストと共に死に、キリストと共によみがえらせられたのです。これによって、キリストが、罪と死の恐れに縛られている私たちを解放し、もろもろの霊はこの方の前に震えおののくしかないのだ、ということ学びました。そこで 3 章に入ります。3 章の言葉は、「**あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら**」から始まります(1 節)。キリストと共によみがえらされた者として、生活の中でどのような歩みをするのか、その新しい歩みを勧めているのが 3 章になります。

### 1A 上にあるものの追求 1-4

1 節から 4 節までは、新しい歩みにおいて私たちが思いと心において、抱いて行かなければいけないことについて話します。すべての歩みは、私たちが信仰によって何を心に抱いているのかによって定まるからです。

## 1B 神の右に座する方 1-2

<sup>1</sup> こういうわけで、あなたがたはキリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。<sup>2</sup> 上にあるものを思いなさい。地にあるものを思ってはなりません。

キリストと共によみがえらされた者として、上にあるものを求め、また思いなさいと勧めています。なぜならば、キリストがよみがえられて、それから天の上り、神の右の座に着かれたからです。午前礼拝で、神の右の座にキリストが着いておられる意味について学びましたが、キリストに結ばれた者として、自分たちも霊的にこの方にあつて、天の座に着いています。後にキリストが来られた時には、自分たちも天に引き上げられて、自分たちの座が与えられるからです。

このような約束と希望が、キリスト者には与えられています。そこで大事なものは二つの動詞です。「求めなさい」という言葉と、「思いなさい」という言葉です。

求めることについては、絶えず熱心に優先順位を付けることです。イエス様が弟子たちに語られた言葉です、「マタ 6:33 まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」私たちは、地上のことに関わります。その一つ一つは、悪いものではありません。けれども、その悪くない事柄でもそれを自分の生活にとって第一とするならば、悪いものになります。それを思い煩い、世の惑わしとも言えます。貪りとも言えます。そこで必要なのは、神の国と神の義を第一にするということです。第一にするというのは、地上のものを全否定することではありません。神は私たちを、世から出ていくように召しておられません。世に遣わして、世にあつて聖なる者、選ばれた者として生きるように召されています。ですからここは、優先順位のことです。この地上に生きているにあたって、絶えず自分を地上のものに引き下げる力に対して抵抗します。そして上にあるものを積極的に、意欲的に選び取るのです。

そして、「思いなさい」という勧めがあります。私たちが何を思っているかによって、その後の歩みが定まりますね。だから、私たちは、祈りが必要です。祈りによって、主が天におられて、神の右の座に着いておられることを思うことができます。だから、私たちは賛美が必要です。賛美によって、主が御座に着いておられることを思うことができます。そしてもちろん、みことばを知ることが必要ですね。みことばをただ見ていだけで、主が天に住んでおられて、そこからご自分の望まれるままに動かしておられることを知るからです。

## 2B キリストの現れ 3-4

<sup>3</sup> あなたがたはすでに死んでいて、あなたがたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されているのです。

私たちが、キリストの内に歩むとはどういうことかを、いのちという要素からパウロは語っています。キリストこそが教会のかしらであると、1章、2章でパウロは話してきました。それは、この方に源があるからです。いのちがあるからです。私たちが、水中にいて、自分の命を支えているのが酸素ボンベであり、その酸素だということを知っているのと似ています。キリストこそがいのちであり、私たちのいのちは、キリストにあるのです。

私たち自身には、では、いのちがあるのでしょうか？パウロは、はっきりと、「あなたがたはずで死んでいて」と言っていますね。ここで、北斗の拳、ケンジロウが「お前はもう死んでいる」と言っているのを思い出すのです！自分自身は、すでに罪に対して死んでいるとみなすのです。自分の古い人はすでに十字架にキリストと共に付けられて、死んだものとみなすのです。2章に出てきた、あらゆる知恵と呼ばれている教えが、すべて、死んでいるはずの自分を生かそうとする試みであることを思い出しましょう。律法主義は、自分の肉の力で、神のみこころを行おうとする試みです。神秘主義、幻を見たりするのも、自分の中で思い浮かんだもの、幻をもてあそんでいます。禁欲主義も、肉体を自分で痛めつけているだけです。自分には何も良いものがなく、何も良くすることはできないのだということを、徹底的に知っていく必要があります。そうすれば、自分に拠り頼むことなど危なっかしくて仕方がない。だから主に力を尽くして拠り頼んで生きることを知るのです。

そして、「キリストとともに神のうちに隠されているのです」と言っていますね。隠されているという言葉を使っています。それは、グノーシス主義の異端の教えが、コロサイの教会に入り込んでいたからです。2章4節に、「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。」と言っていました。グノーシスの人たちが、隠された知識があるとして、霊的なエリート主義を追求していたからです。けれども、知識と知恵の宝はキリストの内に隠されています。同じように、いのちも、キリストとともに神のうちに隠されているのです。

事実、私たちのいのちは、目に見える形でなかなか分かりません。コリント第二で学びましたが、パウロは、目に見える形では迫害を受け、弱くされており、だから批判者たちが、それを良いことに彼は肉にしたがって生きていと裁きました。しかし、彼は死にそうになっているようで、実は生きています。弱いようで、実は強い。このように、なかなか目に見るかたちで、いのちがあるように見えないのです。隠れているのです。それであっても、この方にいのちがあると知って、この方にすがって生きていく。これが、キリスト者です。

<sup>4</sup> あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。

キリストにあるいのちが、いつまでも隠れたままでいるのではなく、いつか現れる時が来ます。それが、この方が地上に、世界の人々が見る形で戻って来られる時です。そして、私たちも、キリ

ストと共に栄光の内に現れます。主が来られる時、ユダの手紙によれば、「見よ、主は何万もの生徒を引き連れて来られる。」とあります(14 節)。この時には正真正銘、神の子として現れるのです。

## **2A 服の着脱 5-17**

### **1B 地にあるからだの部分 5-7**

<sup>5</sup> ですから、地にあるからだの部分、すなわち、淫らな行い、汚れ、情欲、悪い欲、そして貪欲を殺してしまいなさい。貪欲は偶像礼拝です。<sup>6</sup> これらのために、神の怒りが不従順の子らの上に下ります。<sup>7</sup> あなたがたも以前は、そのようなものの中に生き、そのような歩みをしていました。

パウロは、1 節から 4 節で教えたことを、目の前にある自分たちの生活にそのまま当てはめています。私たちはキリストと共によみがえらされた者たちです。そして、キリストが再び来られて、その栄光の姿で現れる時にも私たちも同じように現れると教えています。そこで、目の前にある、あらゆる性的に乱れた慣習については殺してしまいなさいと勧めています。イエス様も同じように教えました。主の祈りで、御国を来させたまえ、みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ、と祈ってから、「日々の糧を与えたまえ」と祈らせるのです。みこころが地上でなることを、日々の糧の中に持ち込みなさいと命じておられるのです。

ギリシア的な考え、つまり、グノーシス主義にあるような考えですと、霊と肉は別々です。肉はそもそも悪いものです。だから、頭では高尚なことを考え、雄弁に語っていても、それが自分の肉体における行いには関係ないのです。一方では、肉にあるものはすべて悪だから禁欲主義に走りまわります。もう一方は快樂にふけるのです。残念なことに、高尚なことを語る神学者でも、実は生活では淫らなことをしていたということが起こります。霊と肉を別々にしているのです。しかし、その反対にも気を付けなければいけません。つまり、キリスト者が、ただ倫理的に生きていくことのものでないのです。そうではありません、1 節から 4 節までにある、主が私たちにしてくださったこと、今、しておられること、これからしてくださることがあり、その霊的なリアリティーがあってこそ、肉体における実践なのです。

ですから、3 節において、私たちはすでに死んでいるとパウロは言いました。そして、地上のものではなく、上のものを思いなさいと言っていました。ですから、コロサイの人々が、以前、当たり前のように慣れ親しんでいた性的乱れについては、殺してしまいなさいと断言しています。いつも、私たちはバプテスマに象徴されている生き方が反映されますね。古い人には死んでいるのです。新しい人になって生きています。ほどほどに満たしたほうがいいよ、と言わないのです。キリストをいのちとしている者たちは、こうした性的乱れの生活とは、一切、関わらないのです。

そして、神が御怒りをもって臨まれるのは、こうした不従順に対してだとパウロは言っています。旧約時代においても、ギリシア・ローマ時代においても、性的な乱れはずっと変わらずにあります。

しかも、それは神々への礼拝とも密接につながっています。エジプトにおける性に関わる習慣は、口にすることも恥ずかしいことです。そしてカナン人のしていたことも忌まわしいことです。その中で、「わたしは聖なる者だから、あなたがたも聖なる者となりなさい。」と主は、ずっと言い続けていかれました。しかし、そのイスラエルが裁かれたのは何だったのか？ マナセの時に、幼い子たちを火の中を通すということをしたからです。これは、性的な乱れの中で望まない妊娠をして、それをモレクという快樂の神に献げたことを踏襲したからです。ギリシア・ローマの時代にも、その乱れは続きます。エペソの町の遺跡に行った時に、遊郭の跡があります。そして、遊郭に行く宣伝が道に刻まれています。ハートのマークもついて。その遊郭には、男根の形をした神の像がありました。

私たちも、毎日の生活でこのような情報に溢れています。いやがおうにも接してしまいます。そこで、私たちは果敢に、日々の生活で、これらのことについて殺していくのです。ガラテヤ 6 章には、「自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。(8 節)」とあります。肉に対して餌を与えると、どんどん肉欲は肥え太ります。それをなくす方法は、飢えさせるしかないのです。

## 2B 口から出るもの 8-11

しかし、実は 7 節を見ますと、コロサイの人たちは、これらの行いがすでに以前の行いになっていたようです。一部にそうした罪に陥ることはあったでしょうが、基本的にそういった生活から離れていたようです。しかし、キリスト者としての歩みにそぐわないことを、気づかぬうちに言い続けていたようです。

<sup>8</sup> しかし今は、これらすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、ののしり、あなたがたの口から出る恥ずべきことばを捨てなさい。

口による行いです。これが意外にキリスト者の間で続けて行っています。世において、人を悪く言ったり、罵ったり、そしることは当たり前に行われています。しかし、キリスト者は姦淫であるとか、淫行については罪意識が強いのに、こういったことについては罪意識が薄いです。イエス様が、パリサイ人たちに、ご自身のことについてそしった言葉について、次のように言われました。「マタ 12:36-37 わたしはあなたがたに言います。人は、口にするあらゆる無益なことばについて、さばきの日に申し開きをしなければなりません。あなたは自分のことばによって義とされ、また、自分のことばによって不義に定められるのです。」

なぜ気づきにくいのか？と言いますと、正義感を抱いているからでしょう。何か知恵と呼ばれるもので語っているからでしょう。私たちは判断について、自分自身が神の裁きの下にいることを恐れて、恐れかしこんで、慎み深く判断しなければいけません。何よりも、心がいつの間にか聖いものから、怒りや憤り、悪意に変えられていることが多いのです。ヤコブも、同じことを語りました。

「3:13-15 あなたがたのうちで、知恵があり、分別のある人はだれでしょうか。その人はその知恵にふさわしい柔和な行いを、立派な生き方によって示さない。しかし、もしあなたがたの心の中に、苦々しいねたみや利己的な思いがあるなら、自慢したり、真理に逆らって偽ったりするのはやめなさい。そのような知恵は上から来たものではなく、地上のもの、肉的で悪魔的なものです。」

コロサイの教会には、律法主義や、キリストに結びつかないいろいろな異なる教えが入ってきましたからなおさらのことでしょう。キリスト者であるあなたがたが、こういった人々に批判されてはいけなく、断罪されてはいけなくともありました。口による言葉がはびこっていたのかもしれませんが。私たちは、怒りや苦み、妬みなどから来る、知恵と呼んで偽っている言葉を捨てないといけません。

<sup>9</sup> 互いに偽りを言うてはいけません。あなたがたは古い人をその行いととも脱ぎ捨てて、<sup>10</sup> 新しい人を着たのです。新しい人は、それを造られた方のかたちにしたがって新しくされ続け、真の知識に至ります。

私たちが、キリストと共によみがえらせられた者、新しく造られた者というアイデンティティーに合わせて、私たちの日々の生活を生きていきます。それはあたかも、服の着脱のようなのです。古い人をその行いと共にもう脱ぎ捨てました。ですから、それらの行いを捨てるのです。脱ぎ捨てるだけでは、裸になってしまいます。キリスト者は、新しい服を身に着けらせていただいている者です。自分がこうしたことをやめようと思うだけでなく、それ以上に、これらの良いことを身に着けていこうとしていくものです。良いことを身に着けたら、自ずと悪いものは捨てることができます。

古いものは過ぎ去って、新しくされたのは、もう起こったこと、完了したことです。けれども、その新しい人がなおのこと新しくされていくのは、プロセスなのです。徐々に、その新しい人に対する知識が増えていくのです。ここがキリスト者の醍醐味でしょう。私たちが、キリストにある神のかたちを知ります。知って、自分自身のうちで新しくされていきます。そして、キリストが形造られていき、それが真の知識なのです。私たちが、知的に知識を得たことが知識ではなく、自分の内で新しくされていくことで至る知識が知識なのです。

<sup>11</sup> そこには、ギリシア人もユダヤ人もなく、割礼のある者もない者も、未開の人も、スキタイ人も、奴隷も自由人もありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。

新しい人として形造られている者たちが、いかに恵みを受けているかを表しています。地上における、いかなる違いも新しい人においては一つであります。ギリシア人とユダヤ人の違いはものすごい大きいですね。民族的な違いです。それから、割礼の有無はユダヤ教徒になっているかそうでないかの違いで、ユダヤ教にとっては救いに関わることですが、それをも乗り越えています。それから、未開の人と続いています。その未開の人の延長で、スキタイ人がいます。スキタイ人は、

黒海やカスピ海を中心にいた、遊牧民族でアナトリア半島、今のトルコにまでやって来ていました。だから、コロサイの人たちにもよく知られていた人々です。エゼキエル書 38 章のゴグとマゴグの、マゴグの地というのは、スキタイ人の地という解釈があります。

そのスキタイ人は、未開人の中の未開人と言ったらいいでしょうか？ 獰猛な野蛮人です。敵のしやれこうべで、血を飲むような人々です。文字を持たない人々でした。それほど未開の人、野蛮の人も、キリストのうちにはもなが一つなのです。こうして、キリストがすべてで、すべてのうちにおられるという広がり、平和が、神の奥義です。

### 3B 深い慈愛の心 12-15

<sup>12</sup> ですから、あなたがたは神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者として、深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を着なさい。<sup>13</sup> 互いに忍耐し合い、だれかがほかの人に不満を抱いたとしても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。

新しい人として、身に着けるべき態度です。怒りや憤り、争いや恥ずべき言葉とは正反対に、深い慈愛の心です。腹からにじみ出てくるような憐れみの心です。相手に対して共感し、むやみに批判したり、非難したりできない状態です。そして、親切、謙遜、柔和、寛容がその特徴です。

今、アメリカで、教会だけでなく、教会の外でも語られているのは、「憎悪」「ヘイト」が文化にさえなっている、ということです。全く、同意点をなくしてしまうような対抗するような形で話してしまう姿。相手に対しては敵対しないといけないかのような雰囲気。そしてヘイトクライムも急増しています。問題は、キリスト者でさえ、そのような流れに乗ってしまっていることです。SNS 上では特に酷いです。キリスト者は、どちら側につくというものではなく、新たな文化をキリストにある文化が生まれてくるのです。それが、ここに書かれている特徴であります。

パウロは、このような態度が私たちに対する神の召しから生まれてきていることを教えます。「神に選ばれた者、聖なる者、愛されている者」だから、これらのことをしなさいと言っているのです。イスラエルが、神の一方的な憐れみで選ばれました。そして聖なる民とされました。その選びの中に、キリストにあって異邦人も入れられました。この選びは、愛されているということに基づいています。選びが、その一方的な愛によって選ばれ、聖められたのも、その一方的な愛によってそうだったのです。ここでは、「主があなたがたを赦してくださったように」と言っていますね。イエス様が、私たちの罪を赦してくださいました。そこにおいて、私たちは自分たちが、恵みによって選ばれていることを知りました。

そして忍耐と赦しがキリスト者の特徴になります。今、アメリカでは「イエス革命」と呼ばれる映画が全米で上映されています。カルバリーチャペルの始まりとなった、ジーザス・ムーブメントを描い

ています。そこには、ヒッピーという、既存の体制に対抗する、カウンターカルチャーに生きている若者が、イエス様を信じて、それで教会に大勢、集ってくるという証しがあります。そこで、忍耐が必要でしょう。伝統的な、保守的な教会の人々もそうだし、そういったものを嫌っていたヒッピーたちにとってもそうでしょう。互いに忍耐し、不満があっても、そして赦し合っていたのです。

<sup>14</sup> そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全です。

パウロは、ずっと服の着脱の比喻を使っています。新しい人を身に着けますが、最後の外套は愛です。これらすべての心の態度が、愛に根ざしたものなのだということです。外套の次は、そこに結びの帯がしめられますが、愛によって私たちが結ばれます。

<sup>15a</sup> キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのために、あなたがたも召されて一つのからだとなったのです。

愛の次は、平和ですね。平和が自分たちの心を支配するようにすることに気を使います。話がずっと、一つのからだであることにパウロは集中させていますね。優しく語り、愛で結ばれて、そして平和の心で、一つからだになっています。私たちが、神のみこころを知る時にそこに平和があるかどうかは、良い指標になりますね。争いや混乱があれば、それは主の導きではありません。

#### 4B 感謝の心 16-17

<sup>15b</sup> また、感謝の心を持つ人になりなさい。<sup>16</sup> キリストのことばが、あなたがたのうちに豊かに住むようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、忠告し合い、詩と賛美と霊の歌により、感謝をもって心から神に向かって歌いなさい。

愛によって結ばれて、平和が心を支配し、次は感謝の心を持つことです。そうした感謝が、キリストのことばが豊かに住むところに与えられます。そしてみことばが心に住むと、そこでは知恵を尽くして互いに教えることが起こります。忠告しあいます。だから、私たちは、お昼の時間や礼拝の後、平日など、心に蓄えられたみことばに基づいて分かち合うことがとても大切です。さらに、私たちは、感謝しながら賛美するのです。詩と賛美と霊の歌とありますが、霊の歌は心に即興的に与えられた歌です。大事なものは、心から神に感謝して歌っていることです。

<sup>17</sup> ことばであれ行いであれ、何かをするときには、主イエスによって父なる神に感謝し、すべてを主イエスの名において行いなさい。

私たちのするすべてのことが、感謝のいけにえを献げる礼拝なのだということを知るといいですね。みなさんの中でしばしば、「教会での交わりが四方山話で終わるのではなく、祈りやみことば、



賛美がもっとほしい」という声が聞こえます。とてもすばらしいことです。主の名によって、すべてのことを行っていきましょう。

### 3A 主にあつて従う関係 18-4:1

ここまでが、教会における互いの関係です。次に、教会から私たちはそれぞれ遣わされます。家庭に遣わされます。次に、仕事場に遣わされます。その時に大事なものは、秩序が神から来ていることを重んじて、主にあつて行っていくことです。人に従うのですが、本質的には主ご自身に従っているのです。

### 1B 家族 18-21

<sup>18</sup>妻たちよ。主にある者にふさわしく、夫に従いなさい。<sup>19</sup>夫たちよ、妻を愛しなさい。妻に対して辛く当たってはいけません。

遣わされる場は、まず家庭であり、家庭の中でも夫婦であります。エペソ人への手紙では、パウロは、もっと詳しく夫婦の関係について取り扱っていますが、ここでは「主にある者にふさわしく」という言葉が大事ですね。かしらなるキリストに結びつき、この方に根ざして、建て上げられ、信仰を堅くして、あふれるばかりに感謝するのが、キリスト者としての歩みですが、主にある者として夫に従います。どうしても、私たちは教会から離れると、また別の世界だと思い込んでしまいがちです。けれども今、何をすることも、主の名において行いなさいとあるように、どこにいても、そこに主がおられます。だから、夫婦生活はまさに、主に仕える現場なのです。

そして大事なことは、夫に対してもパウロが勧めていることです。先ほどの、深い慈愛の心、親切、謙遜、柔和、寛容を身に付けなさいとの勧めがありました、また愛の結び帯の勧めがありましたが、これが夫が妻に対してしなければいけないこと。古い人は、つらく当たってしまいます。赦しがありません。けれども、それらを脱ぎ捨てます。夫に愛されていることを知っている妻が、夫に従うことができます。

当時のローマ社会でも、妻が夫に従うことは教えられていました。けれども、その逆がなかったのです。一方的なのです。しばしば、聖書が昔の制度のままに留まっていると批評されます。男尊女卑だと批評されます。それはとんでもないことで、当時の教えに比べたら、革命的なのは、妻だけでなく夫にも命じているということなのです。それゆえ、歴史的に女性の尊厳や権利というのは、キリスト教会から出てきました。神は、公正な方であられ、それゆえに女も神のかたちで造られた者であり、それゆえ、女だけでなく男にも命じておられるのです。

<sup>20</sup>子どもたちよ、すべてのことについて両親に従いなさい。それは主に喜ばれることなのです。<sup>21</sup>父たちよ、子どもたちを苛立たせてはいけません。その子たちが意欲を失わないようにするために

す。

夫婦の次は、親子関係です。子どもは両親に従いますが、それは言い伝えや常識がそうだからではなく、主に喜ばれることだからです。あるアメリカ人の宣教師が、教会学校で、十戒を教えている時に、「日本の道徳で、父母を敬うことが教えられるが、キリスト者はそうではなく、神に命じられているから敬うんだよ。」というのが印象的です。

そして驚くべきことは、親に対しても教えていることです。夫婦関係と同じように、当時は、子が親に従うことは教えられていましたが、親に子のしつけについて教えることについては、ありませんでした。一方的だったのです。ここにおいても、小さな子を受け入れられたイエス様にあるように、神は子どももご自分のかたちに造られたものとして、みなしておられるのです。

具体的には、「苛立たせてはいけない」ということです。また、「意欲を失わないようにする」ということです。先ほどの妻と同じですが、妻が夫に従うには、愛されていることを知らないと従えないのと同じで、子が親に従順であるのは、子が自分のできる能力の中に留まることができ、安心できるからこそ従うことができます。能力以上のことをするように言う時に、その子は意欲がくじかれてしまうのです。ここにも、古い人を脱ぎ捨て、新しい人を身に着ける行為が必要です。怒りではなく、慈愛の心でしつけるのです。

## 2B 労働 22-4:1

そして次は、働いている場において、主に仕えることを教えています。

<sup>22</sup> 奴隷たちよ、すべてのことについて地上の主人に従いなさい。人のご機嫌取りのような、うわべだけの仕方ではなく、主を恐れつつ、真心から従いなさい。<sup>23</sup> 何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から行いなさい。

当時、ローマ社会は半分以上が奴隷という、奴隷社会でした。奴隷というのは、人間以下の存在でした。しばしば、聖書が奴隷制度を支持しているという非難を受けます。こういった箇所から、そういうのです。それは、大間違いです。むしろ、奴隷が、尊厳をもって生きることができるよう、パウロがここで教えているのです。神のかたちとして造られており、先ほど見たように、奴隷も自由人もキリストにあって一つであり、むしろ後々、奴隷制度を廃止する種を、パウロはここで植えているのです。後世に、奴隷制度の廃絶は、英国で国会議員であったキリスト者が主導して、廃止に追い込みました。

ローマ時代に、奴隷制度はその一部でありましたが、その中で尊厳はキリストのうちにあり、そこで主にしっかりと仕えなさいと、パウロは教えているのです。奴隷は、しばしば主人のご機嫌取り

をしていたので、戒めています。現代の職場でも同じ原則があります。不条理なことがあっても、主はそこに必ずおられるのです。だから、そこでもがきながらも、主を求めて、祈って、憐れみをいただいで、それで真心を失うことのないようにするのです。

<sup>24</sup> あなたがたは、主から報いとして御国を受け継ぐことを知っています。あなたがたは主キリストに仕えているのです。

これは、すばらしい真理です。奴隷という、人間の尊厳を奪い取られている中であっても、主は違います。そこで主に仕えるように仕えれば、報いとして御国を受け継ぐのです。そこでは当然、奴隷ではなく、祭司として王としてキリストと共に統べ治めるのです。初代教会の教会史を調べると、奴隷であったキリスト者の勇敢な信仰の証しが見つかります。

<sup>25</sup> 不正を行う者は、自分が行った不正を報いとして受け取ることになります。不公平な扱いはありません。

ローマ社会の中では、不正を行う奴隷は厳しく主人が罰します。しかし、それがキリスト者の場合は、それが理由ではなく、主からの報いが不正に対してもあるのだという、主への恐れで、不正を行ってはいけないと戒めています。しばしばキリスト者の甘えがありますね。それは、自分はキリストにあって自由になったから、それほど一生懸命働かなくてもよいのだ、として、さぼり気分が出てくることです。そして、キリスト者が自分の上司であればなおさらのこと、甘え心が出てしまいます。いや、むしろ益を得るのは同じ兄弟なのだから、ますます励みなさいというのが、使徒の教えです。

<sup>1</sup> 主人たちよ。あなたがたは、自分たちも天に主人を持つ者だと知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。

奴隷は主人に仕えるのですが、主人は主人で公正と正義を示すことで、自分の主人であるイエス様を覚えるのです。権威の与えられている人は、自分自身が権威の下にいることを覚えていないといけません。このように、徹底して、パウロの教える福音には、キリストがすべてであることが貫かれていますね。主人も、主イエスの前では奴隷と全く同じなのです。

このようにして、パウロは、キリストが右の座に着いておられて、上にあるものを求め、また思いなさいと教えて、それを生活のあらゆる面で行っていくように勧めています。そこにあるのは、正義や公正であり、憐れみや優しさ、赦しであります。だから平和があります。また感謝があります。